

論文の内容の要旨

論文題目 Language as Process: Tokieda Motoki's Theory of Language at the Intersection of Linguistics and Philosophy

(言語過程 –言語学と哲学の交点における時枝誠記の言語理論–)

氏名 アロツ・ラファエル アインゲル

本論は国語学者時枝誠記（1900-1967）の言語理論を言語学と哲学のインターセクション／交点に位置している出来事と見なし、それを近代日本における言語理論の歴史の中で考察することを目指す。時枝は近代日本国語学・言語学を代表する学者の一人であり、西洋言語学を強く批判し、また、日本の近代以前の言語研究をもとにした新たな言語理論・文法論を打ち出したことでよく知られている。彼の言語理論は言語に関する強い理論的・哲学的関心に特徴付けられ、近代日本思想史におけるもっとも重要な言語理論的・言語哲学的試みの一つである。

ところが、時枝は 20 世紀の半ばからしばしば学者の注目を集め、数多くの研究の対象とされたにもかかわらず、彼の思想におけるもっとも理論的・哲学的側面に関して理解が不充分である課題が依然として多数残っている。時枝の言語学および言語理論を取り扱った先行研究は二つの立場に分けることができる。つまり、一方では根来司（『時枝誠記研究一言語過程説一』（明治書院 1985 年））が代表する、時枝に関する国語学史的研究が存在し、また、「時枝文法」や詞辞論、また、陳述論争における時枝の立場、そして彼のソーシャル批判などの特定の課題を扱った研究は比較的が多い。他方では、安田敏朗（『植民地の中の「国語学」―時枝誠記と京城帝国大学をめぐる―』（三元社 1998 年））が代表する時枝に関するイデオロギー批判的研究があり、その立場から当時植民地支配下にあった朝鮮半島において京城帝国大学で教授を勤めた時枝と戦前日本の帝国主義的言語政策の間の関係、または時枝の文法理論が孕むイデオロギー的・政治的問題について重要な研究が現れている。

しかし、以上の二つの立場から行われた研究において、時枝の言語理論の意義を理解するために必要な数多くの課題が十分に明確になっていないと言える。より正確には、時枝による江戸時代の言語研究伝統の解釈の性格、時枝のソーシャル批判において現れる時枝自身の言語哲学的・メタ言語学的主張、また、フッサールの哲学が時枝の理論の構築過程に果たした役割のような問題についての理解はまだ不十分であり、さらに、時枝の言語理論の言語学的側面とそれのより理論的・哲学的側面の双方を考慮に入れる包括的で徹底的研究は現れていない。

このような事態に対して、本論は時枝の言語理論が提起する問題を言語学的視点と哲学的視点の両方を活用する立場、つまりその両学問の歴史、方法論、概念的枠組みを考慮に入れる学際的立場に立脚し考察する。そうすることにより、時枝によるソーシャル批判の言語哲学的意義、現代言語学と言語哲学から見た時枝文法の性格と意義、彼の言語理論の構築にあたってフッサールの哲学が果たした複雑で興味深い役割、また、時枝の言語理論で行われる江戸時代の言語研究の近代的解釈など、つまり言語学的の観点からも哲学の観点からも重要な課題に焦点を当て、時枝が提起する理論的問題の意義、そしてその近代日本の言語理論の歴史における位置を明確にすることを目指す。

本論は7章で構成される。

時枝の言語理論の歴史的位置や先行研究を取り扱う第1章「Introduction: Puzzles on language in modern Japan」に続いて、第2章「Before the process theory of language」は時枝の理論の背景を吟味する。本章では、とりわけ時枝の「詞辞論」の理論的先祖である「てにをは」研究の歴史を日本での書記言語の始まりから江戸時代の国学者の文法論までを俯瞰し、また、時枝の先行者である国語学者山田孝雄の文法の概要を述べる。

第3章「A Japanese Project of General Linguistics」では、言語学史における時枝の言語理論の位置を考察する上で、言語理論の主な特徴を述べ、また、時枝のメタ言語学の根本をなす、言語作用の存在条件の「主体」、「素材」、そして「場面」の「言語の存在条件」の概要を論じ、時枝のもっとも複雑な概念の一つである「場面」の意義を検証していく。さらに、近代国語学の歴史における一番有名なエピソードの一つである時枝のソーシャル批判を扱い、その批判に関して先行研究で十分に探求されてこなかった二つの問題に焦点を当て、まず時枝のソーシャル理解を損なったとで知られている、『一般言語学講義』の小林英夫の和訳において見られる誤訳とそれらが時枝の批判に及ぼした影響の範囲と性質を詳細に検討し、次にソーシャル批判に現れる時枝自身の言語哲学的主張を考察する。

第4章「Tokieda grammar」では近代日本の「四大文法」の一つとして知られている「時枝文法」を扱う。本章では、時枝文法の軸をなす詞辞論の品詞論的意義を述べた上で、次に時枝の文法論の詳細を考察するために、20世紀の言語学の歴史の中でもっとも早く文構造の階層性を形式化することができたと言える時枝の統合論の特徴を分析し、また、時枝が主語述語から成り立つ伝統的文構造を代替とするものとして提唱した「入れ子型」モデル、そして時枝にとってあらゆる文章が満たさなければならない条件についての論述の意義と妥当性について考察する。次いで、しばしば言及される時枝文法と生成文法との類似性について考え、また、生成文法から見た時枝文法の深刻な限界を検証する。最後に、入れ子型モデルに戻り、それは時枝が主張したように主語述語モデルを代替するものではなく、むしろ文構造において命題内容と命題態度の領域の区別を可能とし、主語述語概念を補完する上で非常に重要な理論的装置であ

ると説いていく。

時枝と現象学の関係は第 5 章および第 6 章において論述した。第 5 章「A Productive Distortion」では、まず現象学が時枝の言語理論において及ぼした影響についての根来司、野村剛史、安田敏朗などの先行研究の概要を考察し、時枝のフッサール理解が不充分であり、また、時枝が自らの理論を構築するにあたって参考にしたと述べたフッサールのノエシマ・ノエシス概念と時枝自身の詞辞概念は大いに異なるとする野村の主張が妥当であると論じる。ところが、本章では時枝のフッサールへの接近は、先行研究で暗示されたように誤解に留まるものではなく、かえって、時枝が 1930 年代に悩んだ理論的問題の上で、必ずしも忠実ではないにしても現象学的概念の極めて効果的で興味深い採用過程であると論じ、フッサールの哲学はとりわけ時枝の言語理論の三つの項目、つまり彼の意味論、詞辞論、そして「言語の存在条件」の構築にあたって重要な役割を果たしていることを述べる。したがって、本章においてこのエピソードのより豊富な理解のために必要な準備を行うことを目指し、時枝が自らの理論的プロジェクトのための現象学の必要性を自覚したとされている時期の論文を吟味した上、現象学の創始者であるフッサールの思想の概要を述べ、また、フッサールと時枝の間の媒介となった山内得立の著作『現象学叙説』の要点を論じていく。

第 6 章「Husserlian Hints」ではフッサールの現象学が時枝の言語理論の構築に特に貢献したと言える三つの分野において見られる時枝による現象学的概念の読み方と採用の仕方を考察する。第一に、時枝は近代言語学の意味論を批判しながら提起した、意味を指示対象に対しての作用として捉える立場において見られるフッサール哲学のヒントを検討する。第二に、フッサールの志向性理論と時枝の詞辞論の関係に焦点を当て、時枝が 1930 年代の論文および彼の名作『国語学言論』で行う現象学的概念の複雑な扱い方と採用を検証する。そのために、時枝がフッサールの哲学を学ぶために用いた、山内得立著『現象学叙説』におけるフッサールの志向性理論についての記述とフッサールの著作自体を考察しながら、フッサールの哲学が時枝に提供した理論的ヒントを吟味する。こうして、新たな言語理論の構築に努めていた時枝は、先行研究において重視されたノエシス・ノエマ概念というより、むしろフッサールが『論理学研究』と『イデー』で命題内容と命題態度の領域を区別するために活用している諸概念の方により注目を払っており、また、客観的表現（詞）と主観的表現（辞）を概念化するためにフッサールの志向性理論がどう用いられているかを検討する。

第三に、先行研究で取り扱われてこなかった時枝の言語理論の設立過程において興味深い役割を果たしたと考えられる、さらなるフッサールの概念、つまり言語の存在条件モデルの構築過程に見られる現象学的概念の採用を探究し、したがって、時枝は従来の言語学では把握しがたい敬語やポライトネス表現に関わる現象に光を照らしながら「場面」の概念を打ち出す上で、ノエマの構造についてのフッサールの説明を、忠実ではないにしても創造的で有効な形で自ら

の理論に組み入れていく経緯を考察する。次に、時枝がフッサールを参考にすることにより達成することができた成果の二つ、つまり「場面」としての聞き手の概念化、そして言語における主体性に関する新たな理論的理解の意義について述べ、また、時枝は自らの言語理論を構築するためにフッサールの哲学へ頼った動機に関して検討する。最後に、時枝の言語理論と江戸時代の言語研究の間の複雑な関係について論じ、本章の成果を踏まえて彼による日本言語研究伝統の近代的で独創的再解釈を考察していく。

最後の第7章では本論の成果を概観し、筆者が今後の課題としようとする問題を述べる。